

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

にたずさわって 25 年、これまた私にとって彩鮮で、まさしく眼からウロコのぬけ落ちる思いのなまなましい体験であったことを、ここで報告しておきたい。

5) そのほか、各方面に単独で、あるいは共同の形で名を連ねた研究報告は、書き散らした雑文をも含めて、この 1 年の研究活動の歩みのあとづけとしてそれぞれに、私なりに大切であるが、そのすべてをここであげることはさし控えたい。ただ私が長くそこに職を奉じた名古屋

大学教養部において、鈴木達也教授の停年退官にあたり同教授の手によって編まれた、52 年 3 月、福村出版刊の「心理学ゼミナール」の中に、誘いをうけて、「投映の世界」と題する章を担当し、人間接近への新しい方向づけをここでも提起したことだけをつけ加えておきたい。先学鈴木教授への学恩に、いささかたりとも酬いることができればとの思いからである。

(昭和 52 年 7 月 31 日)

## 研究経過報告－2 年目－

村上 隆

本年も昨年同様、応募の際提出した“研究経過と研究計画”に則して述べる。いつまでもこれにこだわっているのも進歩のない話なので、こういう書き方は本年限りにしよう。3 つの関心領域について順に述べる。

### (1) 心理学における測定の論理

昨年の予告通り、difference scaling における、解の一意性について明らかにすることを課題とした。まだ不十分な点も多いが、本紀要の論文“順序距離尺度の数値的表現と一意性特性について”にその結果はまとめられている。当初のアイディアとはかなり異なった道筋を経ることになったが、一応の目標は達成したと考えている。なお不明な点についての検討を続けるとともに、本文中で述べた conjoint measurement への拡張を通じて、より有用なデータ分析のモデルとしてゆくことを本年の課題したい。

(2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討 明度尺度に関する実験を継続した。今回は、上記の一意性の問題の検討に資るために、条件を縮小し、一定の反射率の背景上において、明度差を反復測定するという実験計画をとった。この結果については、本年の日本心理学会第 41 回大会で発表される。なお、この実験は、

1 名の被験者について、1 日 1 時間ずつ、20 日間を要した。尺度構成法として実用的なものにしてゆくには、この所用時間を減らす工夫に加えて、ほぼ同等の結果を得られるような、より直接的で簡単な実験法を見出す必要がある。この項については、これが本年の課題。

### (3) 多次元解析的手法

本学大学院の後藤宗理、辻本英夫両氏とともに、三相データの分析法について、研究（というより現在のところは学習というべきか）を開始した。この分野で開発された手法の幾つかのプログラミングと、手持ちのデータへの適用という形で現在のところは進めている。その一部は、本年の行動計量学会第 5 回大会で発表される。今後は、問題領域と、データの性質に合わせた、手法の分類と開発にまで進みたいと考えている。なお、項目分析のためのクラスター分析の単純な一方法についての検討を個人研究として行ったが、本紀要では発表に至らなかった。

これも含めて、昨年この欄で予告した 2 つの論文は、いずれも完成させることができなかった。結局、時間の上手な使い方、というのが最大の課題であろうか。

## この一年間の研究経過

蔭山 英順

私の研究活動の大部分の時間は自閉児の遊戯治療の実践活動で費されている。本年度は年少の自閉傾向を持つ幼児、特に 2 歳代から経過を見ることのできたケースをインテンシブに見てきている。こうした早期に発見し、治療的援助をしながら経過を見てみると、3 歳代に入って、興味限局及び同一性保持傾向を顕著に示すケースと自閉傾向を軽減していくケースの存在を確認した。そう

した経過を規定していく要因に関して、自閉傾向を形成していく成因論の関心から現在検討中である。

さらに、従来の研究の継続として、自閉児の学校教育の研究を協同研究として展開してきた。本年度は本紀要に発表したように、情緒障害児学級における授業分析を通して、自閉児の指導方法の問題にアプローチした。こうした研究活動を通して、さらに、現場教師との深い連

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

繋の必要を感じ、今年度から愛知県知立市の知立小学校の情緒障害児学級に可能な限り、参加し、自閉児の学校教育上の問題を直接に感ずるように努力し、細かな問題を担任教師と検討していく活動を実践してきた。また、何回かその自閉児達の家族と夕刻遅くまで話し合ったりして、単に遊戯治療室での自閉児、大学で考える自閉児教育ではなく、現場の中で、また家族とともに考える中で、真の研究活動を求めて実践してきた。こうした活動の一環として、7月にはこの学級の「山の学習」にも参加し、自閉児と共に「カミキリムシ」や「クワガタムシ」を取り、一晩中、一睡もせず扇風機眺めている自閉児と汗みどろになって取組んだことは、私にとっては貴重な体験であった。

一年間にまとめることのできた成果は、つぎのとおり

である。

1. 「適応と精神健康」 シリーズ現代心理学第3巻 幼児・児童の心理 久世敏雄・小嶋秀夫編 福村出版 昭和51年11月
2. 「留年・浪人現象」 シリーズ現代心理学第4巻 青年の心理 久世敏雄編 福村出版 昭和52年5月
3. 「子どもの心理治療—遊戯療法—」 心理学ゼミナール 鈴木達也編 福村出版 昭和52年4月
4. 「中・高校生に見る友情の心理学的構造」 青年心理 4. 金子書房
5. 「自閉症の遊戯療法」講座心理療法—遊戯療法— 福村出版、印刷中

## 研究の課題と経過

梶田正巳

教育心理学教室へ着任して、はや2ヶ年が過ぎた。この間、多忙さにとりまぎれて、なかなか思うように、研究についても、教育についても進まなかった。ここでは、その反省の意味もこめて、この年の経過をまとめてみる。

### 1. 学習型（様式）の研究について

学習型（様式）がどのように認知発達の規定を受けているのか——この課題に実証的資料を提出することが、ここ3～4年来の仕事の一つとなっている。筆者の学位論文を初め、昨年発表した逆転学習の実験的研究もこの課題との関連で行われたものであった。この一年、この主題との関りでいくつかの実験をしたが、その一部分を愛知教育大学中野靖彦助教授との共著で「対連合学習における学習型の研究」のタイトルの下に本年度紀要に執筆した。これは、前著の発達的視座から学習型（様式）に接近する方向とは異なり、成人を対象として、特定の学習型（様式）の出現を規定している諸要因を1～2の学習事態で究明しようと試みたものである。今回の成果は、いまだ十分満足のゆくものではないが、この課題を解明する手がかりが得られるのではないかと考えている。

### 2. 教授=学習過程の研究について

この研究課題については、まだまだ暗中模索の域出ない。昨年より、現場の先生方・卒業生、あるいは塩田芳久本学名誉教授・杉江助手らと共に、教育実践とレバントな関連をもつ教育心理学を目指して、関心のある者が相い寄り、学習=指導研究会を始めた。この一年間

に、すでに十回もの会合を開き、教授=学習過程の諸問題について、熱心に激論を交わした。深淵な問題もしたいに明らかとなり、討論が核心にせまるにつれ、いわゆる classroom learning あるいは school learning の心理学的な理論や研究がまだまだとぼしく、かつ微力であることを痛感した。けれども、この無力感から現実を離れて抽象的、理論的研究のみに自己をとじこめることは不可能である。それをのり越える研究を推し進めなければならないと決意した次第である。それはさておき、1年間の研究会活動を通じて、若干のヒントを捉えつつあるといえる。その一つを本紀要にまとめた。これは、大学院生（博士課程）の鹿内信善君と共に考え、実践しつつある一連の研究の第1段階に当たる。ここでは「数計算の教授=学習；課題分析を通して」としてまとめたが、彼の貢献するところが大である。現在、次の研究として、この分析結果を活用して、小学校1～2年生の数計算の教授=学習過程を明らかにすべく、反応分析を進めつつある。なお、その他のものについては、まだ研究資料をまとめるところまで至っていない。

### 3. その他の事項について

上記の研究の他にも若干の研究を行った。それを下にまとめて記す。

#### 1. 「青年期の諸理論；発達心理的接近」

久世敏雄編「シリーズ 現代心理学4. 青年の心理」 福村出版 昭和52年5月